アニスの
指揮官様
童貞レッスン
体験版

著：恵満
画：黒川おとぎ
体験版は「＃１　アニスと童貞指揮官」まで読めます。

＃1　アニスと童貞指揮官

「指揮官様〜　炭酸水もらうね〜」

空調の音が静かに鳴り響くコマンダールーム。ひょこっと現れたアニスは『シャワー』と『炭酸水』のいつもの二択から後者を選んだ。

鼻歌混じりの軽やかなステップを踏み、冷蔵庫を開けて缶をいくつか取り出すとボリュームのある尻でドアを閉める。ジャケットの下でメロンを2個詰め込んだみたいな胸を窮屈げに揺らし、チラリと部屋の主人に視線を送る。

この前哨基地の最高責任者であり、アニスの上司である指揮官は頑丈そうなデスクで頭を抱えていた。

「うわぁっ、いかにも問題を抱えていますって顔してるわね」

半眼になったアニスが声をかけると、指揮官は青ざめた顔を持ち上げる。普段はなかなかのイケメンなのだが、今はゾンビよりも若干マシといった風体だ。

「アニスか……　好きに飲んでいいぞ」

「そう？　ありがと♡」

許可が降りたところでボブカットの金髪をかきあげ、応接用のソファに腰掛ける。

チラッと指揮官に目を遣ると依然として頭を抱えたままだった。

見兼ねたアニスは手招きしてやる。
「指揮官様も一緒に飲みましょう。ブレイクタイムよ」
気を遣いつつも、手元では既に缶のプルトップを開けている。
そして喉への刺激を楽しみながら、一気に飲み干してしまった。
その間に指揮官はよろめきながら立ち上がり、向かいのソファに腰を下ろす。余分に持ってきた缶を差し出すと彼も同じように炭酸水を飲み干した。が、咳き込んで余計に顔を青くしている。
「おぉ、いい飲みっぷりじゃない」
「げほっ、げほっ……」
「そういえばアークへ行ってたみたいだけど、何かあったの？」
「色々と」
「ふーん。ロイヤルロードで女の子にナンパしたらフラれました～とか？」
「そんな甲斐性が無いことくらい、アニスならよく分かっているだろう」
「イケメンでモテるのに指揮官様って奥手だもんね」
「アンダーソン副司令を経由して、別のお偉いさんに挨拶することになったんだ。そこから食事することになってね」
「じゃあ美味しいもの食べてきたんだ。羨ましい～」
「そうだが……」
含みを持たせて言葉を絞り出す姿は弱々しかった。勝機のない戦場に送り出された時でさえ、こんな顔はしていない。

ただならぬ空気を感じ取ったアニスはすかさずフォローに入った。落ち込む指揮官を見ていて楽しいわけがない。
「もしよかったら私に話してみない？　気が楽になるかもよ。すっごい機密事項だったとしても『誰にも言うな』って命令してくれれば、喋らないし」
「アニスに？」
「指揮官様って私たちのメンタルケアをしてくれるでしょ。面談で楽しく話をするってだけなんだけどね。だからお返しに、今度は私が話を聞いてあげる」
ドンと大きな胸を張るアニスだったが、指揮官の反応は芳しくない。迷っているのか目が泳いでいる。
「指揮官たるもの、自分のメンタルは自分で何とかしなければならないんだが……」
「私のこと、信じてもらえない？」
悲しそうな表情を作ってテーブルに両手を付き、二の腕で胸を寄せながら身を乗り出す。こうすると谷間が強調されて視線が突き刺さる……はずだが、指揮官はジッとアニスの目を見つめていた。
そのせいで体温が一気に上がり、アニスの方が先に視線を逸らせてしまう。
「あ、あはははは……　な～んてね」
「アニスを信じているよ。でも、これは話していいことなのか迷う」
「その気になったらでいいわ。無理に聞き出そうなんて考えてないから」
「……実は、結婚することになった」

「指揮官様が結婚ねぇ……　って、結婚!?　誰と!?」
　驚きのあまり手から落下した空の缶が床に転がってカラカラと音を立てる。全く予想していない方向のサプライズに、アニスの心の余裕は全て消し飛んだ。
「中央政府のお偉いさんの娘だ。ただの会食の筈が、その女性が来て見合いの席になってしまった……」
「へ、へぇ……　どんな人だった？」
「物静かで綺麗な人だったよ」
　拾った空き缶がアニスの手の中でグシャリと潰れる。
　動揺がモロに出て握力をコントロールできていないのだ。
　どうにかソファに座り直して脚を組む。むっちりとした太ももが重なって、ちょっとだけ自分の脚の太さを気にした。
「結婚するんだ。おめでとう、でいいのかな？」
（って、何言ってんだ私！　指揮官様が結婚しちゃったら、こんな風にダラダラと一緒に飲んだりできなくなるじゃない！）
「私にそのつもりはない。問題は、先方の娘が乗り気だということだ」
「指揮官様のこと知ってるの？」
「あぁ。士官学校卒業の翌日にタイラント級のラプチャーを倒した天才的な英雄……だと思い込んでいる」
「あれは私とラピのおかげじゃない」

「その通り。中央政府の喧伝に過ぎない。実際は二人と……マリアンがいなければ私は死んでいた」
「……」
今はもういない彼女（マリアン）のことを思い出す。決して忘れはしない。
そんな想いを噛み締めて指揮官は眉間にシワを寄せている。
「まずは付き合ってみればいいんじゃない？　価値観とか擦り合わせないうちに結婚しちゃうと後悔するらしいわ」
「先方の娘さん、子供は絶対に三人欲しいなんて言ってる」
「うわぁ、ちょっと引くわね。肉食系ってやつ？　今から子作りのこと考えてるなんて」
「……そこが最大の問題だ」
「いいんじゃない？　女の子とエッチしまくれるでしょ」
勿論、本心ではない。アニスなりの皮肉だったが、指揮官の纏う空気が一層どんよりしていた。
あまりにも哀れに見えたので咄嗟にフォローに入る。
「ほ、ほら。そんなに落ち込まないで！　どうしても嫌なら断りましょう！　いいトコのお嫁さんもらって『前哨基地から異動になりました』なんてコトになったら、私も困るし！」
「相手の父親は補給部門を総括しているお偉いさんだ。やんわりと脅されたよ。『断ったら前哨基地への物資が滞るかもしれない』と」
「うわぁ、サイテーの職権乱用ね」
「それに私は童貞なんだ……」
「え？　声が小さくて聞こえないわ。なに？」

「童貞なんだ、私は」
「へ？」
「だから、その、急に子作りとか言われても……　どうすればいいやら……」
大の男が肩を縮めて、今にも消え入りそうだった。
間の抜けた時間が流れ、何もかもが動きを止めている。
そんな静寂を破ったのはアニスだった。
「ぷっ……　あはははははっ!!　ウソっ!!　指揮官様、あんなにモテるのに童貞!?　たくさんニケを侍(はべ)らせて、そんなわけないって!!　あはははははっ……　冗談はやめてよ！　あー、お腹痛い。いひひひっ……」
大爆笑してしまったアニスがトドメを刺し、いじけた指揮官が床の上で膝を抱えて丸まってしまう。
結局。謝って、宥めて、二人の会話が再開されたのは３０分が経ってからだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ごめん、流石に笑い過ぎたわ」
「いいんだ。これに関しては自分もどうかと思っていた」
仲直りの乾杯のため、また炭酸水の缶を開けた。

いくら親しいとはいえ上官を笑い飛ばしてしまったことを反省しつつ、アニスは全く別のことも考えている。計略に長けているとは言い難いが女性として生まれ、ニケになってからも相応の月日が経っていた。それなりの人生の経験値がある。

（これってむしろチャンスじゃない？）

ちびちびと炭酸水に口を付けながら指揮官の顔色を伺う。浮かない様子は相変わらずだったが、話を聞いてもらえた安堵が伺える。

（『自分でもどうかと思っていた』ということは童貞なのを気にしてるのよね）

指揮官はモテる。部下のニケたちからは絶大な信頼を得ていたし、アニスもその中の一人である。

だからこそ、踏み込む前に確認しておかなければならない。

「気になるなら誰かに命令すればいいんじゃない？　ニケは命令に絶対服従なんだからセックスさせろって言えばいいのに」

「そんなことはしたくない」

ここまでは予想通り。もうひと押し。

確信は持っているけど、言葉に出してほしい。そう願ったアニスはわざとらしく続けた。

「そっか。童貞を告白するのって勇気がいるかもね。あ、でも私には言っちゃったからもう平気でしょ」

「そうじゃない。ニケには選ぶ権利があるべきなんだ。みんな、喜びも悲しみも持っている。人間と同じだ。だから絶対服従という今のシステムは正しくない」

「……安心した」
「アニス？」
「ううん、なんでもない」
アニスが綻んだ顔を見せると指揮官は不思議そうに首をひねる。
何が嬉しいのかは伝わっていないが、それでもいい。
（権威を振り翳さないし、ニケを人として扱ってくれる。指揮官様は、指揮官様のまま……）
静かに立ち上がったアニスは、そっと指揮官の横に座って身を寄せる。
形の良いバストがムニュっと変形すると、指揮官の肩が震えて少し後退した。
アニスは構わず腕を絡めて、頬をピタリとくっ付ける。
「指揮官様。私がしてあげる」
「どういう意味だ？」
「私が指揮官様の初めての女になる」
「アニス……」
「もしかして、イヤだったりする？」
「そうじゃないが……」
アニスの身体を通して指揮官の心臓の音が聞こえる。そのリズムはどんどん早くなっていった。
（緊張してるなぁ）
かく言うアニスも緊張している。余裕そうな態度に見えて、精一杯の勇気を振り絞っている。
ここで指揮官に突き放されたら……立ち直れないことはないが、深い爪痕が残りそうだ。

だから逃したくなかった。
素早く指揮官の後頭部に手を回し、強引に引き寄せる。一瞬だけ指揮官の前で止まり、目を合わせてから唇を重ねた。
「むぐっ⁉」
「んちゅっ……」
息を止めて長いキス。強引だったかな、と僅かな後悔を噛み締めながらアニスは指揮官の唇を吸う。
「んじゅる……ぢゅるっ……ぢゅるる……にゅるっ……んぢゅば……ぢゅ、ぢゅ、ぢゅるるる、ぢゅるる」
進んで舌を入れて、指揮官の頬の内側を舐め回す。舌と舌を絡め、互いの唾液を混ぜ合う。
ねっとりした温かさと、淫らな水音に鼓動がどんどん早まっていく。
「ぢゅ、ぢゅる……ぢゅぞぞ……ぢゅるる、ん……ぢゅるるぅ……」
これだけ踏み込んでしまったからにはもう引き下がれなかった。
アニスがゆっくりと顔を離すと、指揮官は真っ赤になっていた。
「ぷはっ♡　あはは。ごめんね、指揮官様」
「……びっくりした」
「キスの味はどう？」
「炭酸の味が強過ぎて、よくわからない」
「もう、正直なんだから……」

力比べをしたら人間がニケに叶うわけがない。そして、アニスの上官はニケを言葉で押さえつけるような人ではない。だから拒否しないと踏んでいた。
計算尽くな行動に軽い嫌悪感を抱きつつ、アニスは指揮官の呼吸が整うのを待つ。
「本当にいいのか？」
「女の子が必死にアプローチしているのに疑う？」
「無理しているように見えたから」
ズキンと胸が痛み、しかし表面には出さない。アニスにとって、これがチャンスであることは間違いない。それを馬鹿正直に告げるつもりはなかった。
「してないわ。こういうことには経験豊富なんだから」
「そうだな。キスも慣れているみたいだし」
「……」
ちくりと胸が痛む。虚勢を真面目に受け取られてしまった。
本当は慣れているわけではない。アニスの言う「経験豊富」というのは人並みのものでしかなかった。
（慣れてるなんて言われて喜ぶわけないでしょ……）
不満と呆れが顔に出ないようにしておく。
こういう鈍いところは改善してほしい。そう思いつつ、いたずら心が芽生えてしまった。いや、邪心だろうか。とにかく、経験豊富だと思われているならリードしない手は無い。
指揮官の初めての女になる、という甘美な響きがアニスの脳内で反射していく。

だから焦ってはいけない。そう自分に戒める。
（それなら……）
キスであの顔だ。
もっと指揮官の初々しいところを楽しみたい。
アニスはニンマリと口角を持ち上げ……
「まずは自慢のおっぱいでシてあげるね♡」
灰色のインナーをずらすと、大きな胸がぶるんと揺れて露わになる。健康的な肌の上では薄桃色の乳首がピンと勃っていた。
空気に触れただけで感じてしまうのは熱烈な視線のせいである。衣服の拘束から解放されたアニスのバストを目の当たりにして、指揮官は息を呑む。
「ちょっとガン見し過ぎじゃない？」
「す、すまない。つい……」
「今さら気にしないわ。面談のとき、いっつも私の胸見てたし」
実は普段からさりげなく二の腕で寄せて谷間を作ったり、わざと前屈みになったりしてアピールしていた。
「気付いてたのか？」
狙い通りに獲物が引っ掛かっている。ニヤニヤして「もちろん」と返した。指揮官はなんとも居心地悪そうに呻いているが、その様子がまた可愛い。
（楽しい～♡　指揮官様って揶揄（からか）い甲斐があるかも♡　戦場でラプチャーを撃ち抜くときも興奮

しちゃう♡）
戦闘中の高揚はアニスの密かな悩みでもあったが、この楽しさはそれ以上だ。命のかかった戦いよりもずっと。
いや、これこそが命をかけた戦いなのかも。そんな馬鹿げた錯覚に陥る。
（み、見られてるだけでムズムズしちゃう。面談のときよりもずっとずっと！　好きな人が私のおっぱいに釘付けなんだもん！）
「アニス、大丈夫か？　なんだか様子が……」
「え？　あっ！　平気よ、へーき！　ふふふ。どうよ、おっぱい大きいでしょ？」
胸でしてあげる、と宣言はしたもののアニスも顔が真っ赤だった。
爆乳が自慢なのは嘘じゃないし、スタイルにも自信はある。太ももや尻が特段に肉付きがいいのはちょっと恥ずかしいが武器になるのだ。
裸の胸を指揮官の顔に近づける。ほんのりと甘い香りが彼の鼻をくすぐった。
「ふふふ。照れちゃってる」
「そ、そういうアニスこそ……」
「そんなことないわよ。さ、おちんちん出して。座ったままでいいから脚を開いてね」
「ちょっと待ってくれ」
「だ〜め♡」
ファスナーを下ろしてやると、勢いよくペニスが飛び出してくる。
十分に勃起しているのは裸の胸を見て興奮したせいだ。血流で腫れ上がってビクビク震えてい

る。
「うわぁ♡　指揮官様、ギンギンに勃起しちゃってるぅ♡」
「ゆ、指で突くな……」
「皮はちゃんと剥けてるのねぇ。おっ？　先っぽの方から透明な汁が出てる♡」
「アニスが触るから……」
「感じちゃった？　でも、このままパイズリしたらおちんちんが痛くなっちゃう。ちゃんと濡らしておくね♡　はぁむぅ～♡」
　じーっと愛しそうにペニスを見つめてから、アニスは大きく口を開く。柔らかな口唇が亀頭を包むと指揮官の腰が浮いた。唾液が肉棒へと絡みつき、熱で溶かされたみたいな快感に呑み込まれていく。
「んぷっ♡　んぢゅ、んぢゅ、ぢゅるるる……♡」
「ま、待て！　口でするなんて聞いてな……」
「んん～？　ふぇらひおじゃないっへ。ぬらひへるらへよ」
「シャワー浴びてないんだが……」
「へーひ、へーひ♡　れろぉっ……　ちゅっ♡　えへへっ、おちんちんに食べちゃった♡　ちゅっ……ッ　んれろぉ……　大きい♡」
「アニスの舌、温かい……　唾液でヌルヌルしてる」
「当たり前よ～　もっと舐めてあげる♡　んれろぉ……♡　ぺろぺろっ、ンんっ……　はぁ♡　私まで感じちゃう♡　指揮官様のおちんちん舐めるのがクセになっちゃいそう♡」

肉棒を咥えたまま淫靡に笑いかけると、指揮官の身体がビクリと震えた。必死に射精を堪えて、脚の間に力を込めている。

「んんっ、んちゅっ♡　頑張るわねぇ♡　じゃあ、こんなのはどう？　はぁむ♡　んぢゅるっ♡　ちゅぷ、ちゅぷ、んぢゅぢゅ……♡　ぢゅぞぞぞぞっ……じゅるるる♡」

大きく口を開けて亀頭全体を口で頬張る。濡らしているだけと言いつつ、しっかりとペニスに吸い付いた。頭を前後に動かしながら、唾液を練り込むように舌を絡める。浮き出る血管をなぞる度に指揮官は敏感に反応してくれた。

（これが指揮官様の味ぃ～♡　喉の奥でも感じるぅ♡　おちんちんのニオイがツーンと鼻まで昇ってきて、お口の中が指揮官様でいっぱいになってるぅ♡）

丹念にしゃぶっていると股倉が濡れてきた。ホットパンツの隙間から垂れてきた愛液がむっちりした太ももを滴り、堪らず膝同士を擦ってしまう。全身から濃厚な雌の匂いを発しているのが自分でも分かる。

（うわっ、濡れちゃってる♡　私の愛液に指揮官様の臭いも混じって……　頭がクラクラしちゃう♡　おちんちん美味しすぎぃ♡）

「ぢゅ、ぢゅぼっ♡　ちゅるるっ……♡　じゅぞ、じゅぞ、じゅるっ♡　んぢゅ、ぢゅるっ……　ぢゅば、んぢゅばっ……　んぷっ、どお？　きもひイイ？」

「あぁ……　すごく気持ちいい……」

「んふっ♡　わらひも、んじゅぼっ♡　じゅぞぞっ♡　きもひよくてぇ、濡れてきちゃった……♡」

激しく吸い付く度にジュボジュボといやらしい水音が響く。それが堪らなく耳に心地良い。

唇を窄めて搾り取るように頭を前後させていると、大きな脈動を感じる。
「アニス、もう……」
「射精そう？　いいよ♡　お口で受け止めてあげるから、い～っぱい射精して♡　はむぅんっ♡　じゅぼっ……」
股間に顔を埋め、肉棒を喉の奥まで咥え込む。指揮官が限界に達したのはその直後だった。
ドピュ、ドピュピュっ……　ドピュっ……
喉に焼けるような熱さの精液が雪崩れ込んできた。ドロリとした特濃のザーメンの味はアニスの頭を白濁で染めていく。
「んんっ!?　ごくっ……　ごきゅっ……　ぢゅるるっ、ぢゅっ♡　くちゅっ……♡　んぢゅっ♡」
敢えて全部は飲み込まず、わざと口に溜めてくちゃくちゃと下品に音を立てる。
呆然と見下ろす指揮官を上目遣いに捉え……
「あ～っ……」
アニスはゆっくりと口を開き、溜め込んだザーメンプールを見せつける。
「くちゅぅ♡　ぢゅる♡　んん～♡　ぢゅぢゅっ♡」
精液を口の中で転がし、味わいながら淫靡な笑みを浮かべる。その妖しい様子に指揮官はゴクリと唾を呑んだ。
「ん、ごくっ……　ごくんっ♡　指揮官様の精液、と～っても濃いのね♡　それにすごい臭い♡　身体に染み付いちゃいそう♡」

「っ……」
「あ、恥ずかしがってる♡　おっぱいより先にフェラチオで射精させちゃった♡」
「すまない、我慢できずに射精してしまって……」
「私のお口が気持ちよくて、おちんちんピュッピュ～ってしちゃったもんね♡」
「……」
「違うの？　というか、フェラチオされるのって初めて？」
「気持ちよかったです。……初めてです」
「緊張して敬語になってる……　もっとリラックスしてよ～」
「そんなこと言われてもな」
　内股になった指揮官の姿がおかしくてアニスはニヤッとする。
　喉を滑り落ちていった精液がお腹の中でも熱いまま、じんわりと身体に染み込んでいくようだった。
「さ、早く続きをしましょ♡」
　完全にペースを握ったアニスは再び指揮官のペニスに向き合う。
　射精したばかりの肉棒はまだまだ元気で、硬さを保ったまま雄々しく反り返っている。
　テカテカ光る亀頭をさらに舐めて唾液を刷り込む。
「んちゅっ♡　れろぉ～……　ぺろぺろ♡　はむぅん♡　んぢゅ、ぢゅぼぼぼっ♡　れろれぉ♡　じゅるるるっ♡　じゅぼ、じゅぼ♡」
「アニス……　さっきより、激しい……」

「ちゅぱぁっ♡　あ、いけない、いけない。おっぱいでシてあげるんだった。おちんちんが美味しくて、夢中になっちゃった♡」

口惜しそうに顔を離したアニスは胸を自分の手で軽く揉んで具合を確かめる。ピンと勃った乳首は上向いていて、つまむと電気が走ったみたいに快感が迸る。

「おちんちんは濡れてるわね♡　じゃ、おっぱいで食べちゃおう♡」

ぎゅっと胸を寄せてペニスを包み込んでいく。柔らかな感触に包まれた指揮官は情けない顔をしながら、すぐに果てないようにと耐えていた。そんな様子をアニスは上目遣いで見つめている。

「まだ挟んだだけよ？」

「おっぱいの間って温かいんだな……」

「指揮官様のおちんちんも熱くて火傷しそう♡　こうして、挟んだままコネコネして……」

はち切れんばかりの爆乳でペニスを包み、肉の上から手でコネ回す。心地よい圧力に指揮官の声が漏れるとアニスはわざとペースを落として反応を伺った。

「ほらほらぁ♡　どうかな、指揮官様ぁ♡」

「柔らかくてすごく気持ちいいんだが……」

「だが？」

「アニスの胸が大き過ぎて全部隠れてしまう」

「ふふんっ、サイズには自信あるもんね♡　じゃあ、自慢のおっぱいで呑み込んだままおちんちんズリズリしちゃうね♡」

胸の間にペニスを挟んだまま、身体ごと押し付けるように大きく動いて上下させる。唾液でたっ

ぷり濡れた肉棒がぬちゃぬちゃと音を立て、快楽で震えていた。
「まだまだ我慢するつもりねぇ♡　どれくらい持つかなぁ？　えいっ、ズリズリ♡」
「くっ……」
「フェラとは違う気持ちよさでしょ？　やさし～く包んで、ずりゅずりゅ～ってしながら温かくなる感じ？　こうやって挟んでいると指揮官様のことすごく感じる♡　おっぱいの間で、精子ピュッピュしたいよぉっておちんちんが喜んでるわ♡」
　ずりゅ、ずりゅ、ぬちゅ……
　リズムよく乳房を上下させる度に、アニスの鼻先にムワッとした雄の臭いが漂ってくる。口の含んだときとはまた違うフレーバーにうっとりしながらパイズリを続けた。
「もうちょっと濡らすね。あー……　はむぅっ♡」
　胸に挟んだまま器用に亀頭を咥え、唾液で湿らせる。滑りが戻ったら搾り取るみたいにペニスの根本からしごきあげる。
「んしょっ、んしょっ……　んん～♡　はぁ、はぁ……」
　唇から漏れる息は荒い。熱っぽく「指揮官様ぁ♡」と繰り返し、いびつに変形させたおっぱいで責めていく。
「指揮官様のオチンポぉ、熱くて硬くて……　素敵なのぉ♡　私の唾液と、汗と、先走り汁が混ざっていやらしい音がしてるぅ♡」
「アニスっ……！」
「ふわぁ!?　おちんちんピクピクしてるぅ♡　またイキそう？　イキそうなんでしょ♡　いいわ。

熱いザーメン、私のおっぱいの中で全部受け止めてあげるぅ♡」
ずちゅっちゅっ、ずりゅりゅりゅ、ぎゅ～っ
両手で乳房を挟み込んだアニスはピタリと息を止め、目を瞑って胸の間に意識を集中する。
肉棒が激しく脈動し、白濁液が昇ってくるのを肌で感じながら感嘆を漏らした。
「あはぁッ♡　ザーメンいっぱい出てりゅうぅ♡　ずぴゅぴゅ～って私のおっぱいから溢れてるぅ♡　二回目なのにすっごい量♡」
挟み込まれたままペニスが果て、逃げ場をなくした精液が火山の爆発したかのように胸の谷間から溢れ出てくる。
白濁した飛沫がアニスの顔にも届き、唇の触れた一雫を舌で舐め取って「んんっ♡」っと声を上げた。
手を離すとおっぱいが解放され、ベトベトに汚された跡が露わになる。ドロっとしたザーメンが瑞々しい肌を伝って滑り落ちていく。
「おっぱいがドロドロになっちゃった♡　指揮官様、い～っぱい出してくれたもんねぇ♡　ちゅぱっ♡」
指先で胸の間を撫で、掬い取った白濁を口元に運ぶ。丹念にしゃぶって指揮官の顔を見上げたアニスは次の行為に期待した。
（いよいよ本番♡　次は私のオマンコで指揮官様のを受け止めてあげるんだから♡）
ついに指揮官の初めての女になれる。そんな期待で顔が蕩けて、思わず涎が垂れそうだった。
が、しかし……

「うぅ……」

指揮官がぐったりしている。

半開きの口元からは霊魂のようなものがはみ出ていた。

全身が真っ白に燃え尽きていて悲壮感を漂わせてはいるものの、その表情は実に満足そうである。

「え？　し、指揮官様!!　どうしたの!?」

慌てて肩を揺さぶるも反応がない。力の入っていない首が揺れるだけだった。

「え？　え？　死んじゃった!?　イヤよ、そんなの！　指揮官様を腹上死させちゃったなんて……!!　そうだ、医者を呼ばないと！」

着崩れしたまま通信回線を開き、慌ててメアリーを呼ぶ。

咄嗟の判断は正しかったものの、騒ぎを聞きつけて集まってきた他のニケたちには何をしていたのか問い詰められてしまう。

――指揮官をパイズリで気絶させた女――

アニスがそう呼ばれるようになったのはまた別のお話。

（体験版・了）